

# Vルコトガアルの意味・用法

徳 永 辰 通

## 1 はじめに

松木正恵(1990)は、複合辞を「いくつかの語が複合して、ひとまとまりの形で辞的な機能をはたすもの」と定義し、複合辞を形態の上から次の三種に分類する。

- 第一種複合辞 本来「辞」である助詞・助動詞のみが二語以上複合してできた複合辞
- 第二種複合辞 本来「詞」である名詞のうち実質的意味が薄れている形式名詞を中心にして複合した複合辞
- 第三種複合辞 本来「詞」である動詞・形容詞・形容動詞といった用言のうち実質的意味が薄れている形式用言を中心にして複合した複合辞

「コト+助詞+存在詞」形式の複合辞には、Vルコトガアル、Vルコトガナイ、Vタコトガアル、Vタコトガナイ、Vルコトハナイ、コトモアッテが見られる。これらの複合辞の構成要素であるコト、存在詞は実質的意味が薄れたものである。高橋太郎(1994)を参考にすると次のようになる。

- (1) 彼に二つほど伝えることがある。
- (2) 天気がいいと、ここから富士山が見えることがある。

(1)は、「伝える」ナニカが存在することを表している。(1)のコトが表すのは「伝える」ナニカであり、コトとアルとが文の部分として独立している。一方(2)のコトはナニカを表しているのではなく「ここから富士山が見える」という動詞句を名詞化し、コトとアルとが複合しコトガアルでひとまとまりになって「時々事態が生起する」というような意味を表している。このように、コトとアルの実質的意味が薄れていることから、「コト+助詞+存在詞」形式の複合辞は第二種複合辞と第三種複合辞にまたがるものと位置づけられる。

さて、「コト+助詞+存在詞」形式の複合辞は、形態的な制限の強いものと、制限の弱いものとに分類できる。コトモアッテは構成要素の助詞がモに限られ、コトハナイは助詞がハ、モに限られる。これらとは異なり、Vルコトガアル、Vルコトガナイ、Vタコトガアル、Vタコトガナイは、構成要素の助詞にガ、ハ、モ以外にもサエ、スラなどの副助詞もとることができ、形態的な制限が弱い。このような形態的な制限の弱い「コト+助詞+存在詞」形式を、本稿では「コト+ガ+存在詞」形式の複合辞とする。

[表1] 「コト+助詞+存在詞」形式の複合辞の分類

「コト+助詞+存在詞」	{	制限強	コトモアッテ、コトハナイ	} 「コト+ガ+存在詞」 形式の複合辞
		制限弱		
			Vタコトガアル、Vタコトガナイ	

「コト+ガ+存在詞」形式の複合辞は、コトが事態を名詞化し、それに対する有無を述べる形になっている。コトによって名詞化される事態部分を「事態部」、アル・ナイの存在詞部分を「みとめ部」と呼ぶと、「コト+ガ+存在詞」形式の複合辞は、形式的には、事態部がル形かタ形か、みとめ部がアルかナイかで対立している。しかし、実際にこの対立は認められるのかどうか考察するものは見あたらない。

次章で詳しく見ていくが、これまでの先行研究はVルコトガアル、Vルコトガナイに複数の意味・用法を認めるのか認めないのか一様ではない。「コト+ガ+存在詞」形式の複合辞の対立を考察するためには、Vルコトガアル、Vルコトガナイの意味・用法を考察する必要がある。Vルコトガナイについては、Vルコトガアルの意味・用法を考察し、それをもとに考察するという手順をとる。そのため、本稿ではVルコトガナイについては扱わない。

本稿では、まず、「コト+ガ+存在詞」形式の複合辞の対立を考察する第一歩として、Vルコトガアルの意味・用法を考察する。これまで、「コト+助詞+存在詞」形式の複合辞は、2. 1の[表2]に示すように、意味を抽象して捉えられている。そして、2. 2で述べるが、Vルコトガアルは「時々おこることをあらわす」もの(以下、これを〈時々生起〉とする)と「可能性が実現することをあらわす」もの(以下、これを〈可能性〉とする)とが認められる。しかし、〈時々生起〉や〈可能性〉というように、意味

を抽象して捉えると両者の連続が捉えにくい。本稿では、〈時々生起〉と〈可能性〉を、意味を抽象して捉えるのではなく、事態生起のあり方の側面を捉えることにより、両者を連続的に捉えることを試みる。

## 2 先行研究

### 2.1 「コト+ガ+存在詞」形式の複合辞の先行研究

「コト+ガ+存在詞」形式は、個別的に扱われることが多い<sup>(注1)</sup>。そのなかでも「コト+ガ+存在詞」形式を網羅的に扱っているものもある。管見に入る限りでは、高橋(1994)、藤森弘子(2003)がそれである。それぞれの形式が表すものをまとめると [表2] のようになる<sup>(注2)</sup>。

[表2] 先行研究に見る「コト+助詞+存在詞」形式

	高橋(1994)	藤森(2003)
コトモアッテ	理由をあらわす	—
Vルコトガアル	時々おこることをあらわす 可能性が実現することをあらわす	蓋然性
Vルコトガナイ	ときどきおこることをうちけす 実現することをうちけす 実現の可能性をうちけす	不生起
Vタコトガアル	経験のあることをあらわす	経験
Vタコトガナイ	経験のあることをうちけす	経験の否定
Vルコトハナイ	必要のないことをあらわす	不必要

高橋(1994)も藤森(2003)も、各形式の表す意味を抽象してまとめているが、これらがどのように連続するののかについては述べていない。

Vタコトガアル、Vタコトガナイ、Vルコトハナイについては、高橋(1994)も藤森(2003)も複数の意味・用法を認めていない。そして、高橋(1994)も藤森(2003)も、これらの意味・用法を同様のものとして捉えている。その一方で、Vルコトガアル、Vルコトガナイについては、高橋(1994)では複数の意味・用法を認めているが、藤森(2003)では複数の意味・用法を認めておらず、両者の捉え方には異なりが認められる。

### 2.2 Vルコトガアルの意味・用法

Vルコトガアルの意味・用法は、2.1の [表2] の高橋(1994)のように二つの意味・

用法を認めるものと、藤森(2003)のように複数の意味・用法を認めないものとに大別される。

Vルコトガアルに二つの意味・用法を認めるものは管見に入る限りでは高橋(1994)、高橋太郎(2005)がある。

(3) トロッコで運んでくる石炭の中に拇指や小指がバラバラに、ねばって交ってくることがある。[高橋(1994)147頁、高橋(2005)120頁]

(4) 何もそんなに案じるにも及ぶまい焼けばくいと何とやら、又よりの戻ることもあるよ。[高橋(1994)149頁、高橋(2005)121頁]

(3) を高橋(1994)、高橋(2005)は「ときどきおこることをあらわす」ものとする。(4) は高橋(1994)で「可能性が実現することをあらわす」ものとし、高橋(2005)で「可能性のあることをあらわす」ものとする。このことから、高橋(1994)の「可能性が実現することをあらわす」ものは、「可能性のあることをあらわす」ものと同一のものとして捉えられよう。以上、Vルコトガアルに二つの意味・用法を認めるものは、「ときどきおこることをあらわす」もの(〈時々生起〉)と、「可能性のあることをあらわす」もの(〈可能性〉)とを認めていることが確認できる。

一方、複数の意味・用法を認めていないものは、藤森(2003)の他に、仁田義雄(1981)、藤森弘子(2000)、呂雷寧(2010)がある。

仁田(1981)は、モダリティとの関連でVルコトガアルを取り上げている。その中で、Vルコトガアルは事象成立の可能性を表すとしている。仁田(1981)は、「傾向性と名付ける方が適当な場合も可能性の用語の中を含める」とするように、Vルコトガアルは〈可能性〉のほかに「傾向性」を表す場合があるとする。「傾向性」は〈時々生起〉の用法と考えられそうだが、仁田(1981)は「傾向性」がどのようなものなのかは明らかにしていない。

藤森(2000)は、Vルコトガアルを可能性があることを表すとし、藤森(2003)では『Vることがある』の基本的な意味は《蓋然性》である」としている。

(5) 東京でも雪が降ることがある。[藤森(2003)53頁]

(6) 私の国ではバスがよく遅れることがある。[藤森(2003)53頁]

(7) スポーツ選手でさえ、急に運動するとけがをすることがある。だから、普通の人は十分に準備体操をしたほうがいい。[藤森(2003)53頁]

藤森(2003)は、(5)を「めったにないことだが、そのような事態が起こる可能性がある」とし、(6)を「頻度の副詞を伴って、可能性の頻度を表す」とする。そして(7)を挙げて、Vルコトガアルは「ある条件下では、このような事態に陥る可能性があるということを表す場合によく使われている」としている。藤森(2003)ではVルコトガアルの意味を「蓋然性」としているが、その内実は「可能性があること」を表すとしているようである。

呂(2010)は、Vルコトガアルを無意志自動詞表現と比較し、Vルコトガアルを「事物に潜んでいる、現在または未来において(ある条件下で)ある事柄が発生する可能性」があることを表すとしている。

Vルコトガアルに複数の意味・用法を認めていないこれらのものは、いずれも「可能性があること」(〈可能性〉)を表すとしている。しかし、Vルコトガアルの意味・用法を〈可能性〉のみとするには問題があると考えられる。次の例を見てみよう。

(8) 力というものはある時は残酷な一面を持つことがある。[藤森(2000)39頁]

(9) 夫を待つ宙ぶらりんな夜、そんな空想を遊ばせてしまうことがある。

[藤森(2000)39頁]

(10) このやり方では、失敗することがあるよ。[呂(2010)167頁]

(11) 彼は思い通りにならないと怒り出すことがある。[呂(2010)168頁]

藤森(2000)は、(8)(9)などを挙げ、「起こる可能性」があることを表しているとする。また、呂(2010)は(11)を『『彼』に、『思い通りにならない』場合、『怒り出す』という事態が生じる可能性が恒常的に存在する』ことを表すとする。

たしかに、(10)は(10a)「このやり方では、失敗する可能性があるよ」と言い換えられるため、事態生起の可能性を表していると考えられる。しかし、(9)のコトガアルは、(9a)「夫を待つ宙ぶらりんな夜、そんな空想を遊ばせてしまう可能性がある」にすると意味が異なる。(8a)(9a)(11a)も、(8)(9)(11)のコトガアルとは意味が異なる。

(8a) 力というものはある時は残酷な一面を持つ可能性がある。

(9a) 夫を待つ宙ぶらりんな夜、そんな空想を遊ばせてしまう可能性がある。

(10a) このやり方では、失敗する可能性があるよ。

(11a) 彼は思い通りにならないと怒り出す可能性がある。

(8)(9)(11)のVルコトガアルは、事態生起の可能性があることを表しているだけでなく、発話時まで時々事態が生起していることをも表している。そのため、Vルコトガアルの意味・用法を一括して〈可能性〉のみとするのは適当ではなく、〈時々生起〉と〈可能性〉の二つを認めるべきであると考ええる。

さて、Vルコトガアルの意味を〈時々生起〉や〈可能性〉というように意味を抽象して捉えているものとは異なり、Vルコトガアルの事態生起の在り方の側面を捉えているものに金水敏(2000)がある。金水(2000)はVルコトガアルを「設定時の前後に出来事的不定期的・偶発的な生起があることを示す」とする。金水(2000)にはVルコトガアルの意味・用法を一つと捉えるのか、複数と捉えるのか分類が示されていない。

以上、Vルコトガアルの記述を見てきた。Vルコトガアルは〈時々生起〉〈可能性〉というように、意味を抽象して捉えるものが多かった。意味を抽象して捉えると、どのように連続するのか捉えにくい。連続的に捉えるには、事態生起の在り方の側面を捉えることが有効であると考ええる。3. 1では金水(2000)の記述を参考にVルコトガアルを考察していく。

### 3 Vルコトガアルの意味・用法

Vルコトガアルの意味・用法を〈可能性〉のみとするには問題があった。また、〈可能性〉の他に〈時々生起〉を認めるにしても、それぞれがどのように連続するのか明らかにされていなかった。意味・用法を連続的に捉えるために金水(2000)の記述を参考に〈可能性〉と〈時々生起〉の意味・用法を考えていく。

(12) このやり方では失敗することがある。別のやり方にしたほうがいいだろう。

(13) 生きていれば、また慎二に会うことがあるよ。

(14) 岐阜は雪が積もることがある。だから冬はスタッドレスタイヤに履き替えている。

(15) あの古本屋は珍しい本を見かけることがある。そのためよく足を運んでいる。

(12)～(15)はいずれもVルコトガアルの形になっている。(12)(13)は〈可能性〉、(14)(15)は〈時々生起〉と考えられる。Vルコトガアルの形で〈可能性〉も〈時々生起〉も表すということは、Vルコトガアルの意味・用法はコトガアルの承ける事態や前提によって決定されるということである。以下、(12)～(15)の事態の特徴を考察していく。

(12)(13)の「このやり方で失敗する」「慎二に会う」という事態は、発話時において未実現の一回的事態である。そして発話時以降に生起するかもしれない事態である。一方、(14)(15)の「岐阜に雪が積もる」「あの古本屋で珍しい本を見かける」という事態は、発話時までには複数回既実現の事態である。このことから、〈可能性〉と〈時々生起〉は、Vルコトガアルのコトガアルの承ける事態が「未実現・一回的」か「既実現・複数回の」かという点で異なることが指摘できる。

それでは、〈可能性〉は「未実現・一回的」であれば、どのような事態でも承けるかというとはそうではない。「未実現・一回的」であっても、(16)(17)のように発話時以降生起が確定している事態を承けることはできない。

(16) \*2012年7月27日からロンドン五輪が開催されることがある。

(17) \*次のサッカーのワールドカップはブラジルで開かれることがある。

次の(18)の「北海道に行く」、(19)の「こちらにいらっしゃる」という事態は、発話時以降の生起が確定しているものではなく、生起する予定となっている事態である。これらは、発話時以降の事態生起の可能性が高いものの、事態不生起の可能性も含んでいる。

(18) 今度、北海道に行くことがあります。その時、時計台に行くつもりです。

(19) 近々こちらにいらっしゃることはありますか？

〈可能性〉が承ける事態は「未実現・一回的」で、かつ、発話時以降の生起が不確定的という特徴が認められる。

次に、〈時々生起〉は「既実現・複数回の」であっても、(20)(21)のように発話時において定期的・習慣的に生起する事態を承けることができない。

(20) \*ここに引っ越してから毎朝公園に散歩に行くことがある。

(21) \*退院してから毎日リハビリをすることがある。

〈時々生起〉の承ける事態は、「既実現・複数回の」で、かつ、発話時において不定期的・非習慣的に生起する事態という特徴が認められる。

〈可能性〉の「発話時以降の生起が不確定な事態」と、〈時々生起〉の「発話時にお

いて「不定期的に・非習慣的に生起する事態」とに共通する点は、金水(2000)にあるように、「偶発的に生起する事態」であると考えられる。

(12)(13)の「このやり方で失敗する」「慎二に会う」という事態は、偶発的に生起する事態である。発話時以降に偶発的に生起するということは、発話時においてその生起が不確定的であることに他ならない。

また、(14)(15)の「岐阜に雪が積もる」「あの古本屋で珍しい本を見かける」という事態も、偶発的に生起する事態である。偶発的に生起する事態が、複数回生起するその在り方は、不定期的にあり、非習慣的である。

(12)(13)のような、偶発的事態の一回的生起を表すものを「偶発的生起」とする。(14)(15)は、「岐阜に雪が積もる」「あの古本屋で珍しい本を見かける」という偶発的事態が発話時まで複数回、不定期的に・反復的に生起し、発話時以降も偶発的に反復的に生起することをも表している。このような、偶発的事態の不定期的に・反復的生起を表すものを「<sup>(注3)</sup>不定期的に反復」とする。

ここまでをまとめると、偶発的生起の事態の特徴は「偶発的・一回的・未実現・不確定的」、不定期的に反復の事態の特徴は「偶発的・反復的・既実現・不定期的に・非習慣的」となる。そうすると、次のような例が問題となる。

(22) 来年は北海道に行くことが時々あります。

(23) 来月からの数ヶ月間、工事のため断水になることがあります。

(22)の「北海道に行く」、(23)の「断水になる」という事態は未実現であり、偶発的であり、その生起は不確定的である。さらに、反復的でもあり、その生起のあり方は不定期的に・非習慣的である。この用例を偶発的生起とするのか、不定期的に反復とするのが問題となる。この問題は、偶発的生起と不定期的に反復とを分ける根本的な特徴は何であるのかという問題に関わる。

偶発的生起と不定期的に反復とを分ける特徴は、Vルコトガアルの事態が反復的であるか一回的であるかという点に求められると考える。というのも、未実現か既実現かという点で区別した場合、Vルコトガアルのみとめ部をタ形にしたVルコトガアッは事態が既実現となるため、Vルコトガアッには偶発的生起の用法が認められず、すべて不定期的に反復となってしまう。しかし、一回的な偶発的生起があったことを表す(24)(25)を不定期的に反復とするのは適当ではない。



- (24) 学生時代、一回中村のところに遊びに行くことがあった。
- (25) 三年前、一回寛と飲むことがあった。
- (26) 学生時代は、時々中村のところに遊びに行くことがあった。
- (27) 三年前は、たまに寛と飲むことがあった。

そのため、偶発的生起か不定期的反復かは、事態が一回的か、反復的かという点で区別されよう。(24)(25)は一回的であるため偶発的生起、(26)(27)は反復的であるため不定期的反復とするのが適当である。(22)(23)も、事態が反復的であるため、不定期的反復と認められる。

以上を、まとめると[表3]のようになる。

[表3] Vルコトガアルの意味・用法と事態の特徴

用法	意味	事態の特徴
偶発的生起	偶発的事態の一回的生起	偶発的・一回的
不定期的反復	偶発的事態の不定期的・反復的生起	偶発的・反復的

#### 4 おわりに

これまで、Vルコトガアルは意味を抽象して捉えられることがほとんどであったが、本稿では、意味を抽象するのではなく、事態生起の側面を捉え、Vルコトガアルの意味・用法を考察してきた。そして、本稿では、Vルコトガアルに偶発的生起と不定期的反復を認めた。偶発的生起と不定期的反復との違いは、事態が一回的であるか、または反復的であるかという点に求められる。事態が一回的であれば偶発的生起、事態が反復的であれば不定期的反復と認められる。

Vルコトガアルに偶発的生起と不定期的反復の意味・用法を認めただうえで、Vルコトガアツタや、Vタコトガアルなどの「コト+ガ+存在詞」形式の複合辞を整理していくことが今後の課題である。

#### 注

- (1) コトモアツテについては前田直子(2006)がある。Vタコトガアルについては池田英喜(1995)、池田英喜(1996)がある。
- (2) 藤森(2003)ではコトモアツテを取り上げていない。
- (3) 高橋(2005)では、継続相の用法の一つに「くりかえし過程のなかにあるすがた」

を表すものを認めている。高橋(2005)に従えば、不定期的反復はこれに該当しよう。

## 参考文献

- 池田英喜(1995)「シタコトガアルとシテイル—経験を表す二つの形式」『日本語類義表現の文法(上)』(宮島達夫・仁田義雄編) くろしお出版143-148頁
- 池田英喜(1996)「経験をあらわす『シタコトガアル』について」『待兼山論叢』第30号(大阪大学大学院文学研究科) 11-26頁
- 金水敏(2000)「時の表現」『時・否定と取り立て日本語の文法2』(金水敏・工藤真由美・沼田善子著) 岩波書店1-92頁
- 高橋太郎(1994)「ダブルテンスの観点からみた<スルコトガアル>の種々相」『立正大学文学部論叢』第100号139-159頁
- 高橋太郎他著(2005)『日本語の文法』ひつじ書房
- 仁田義雄(1981)「可能性・蓋然性を表わす擬似モード」『国語と国文学』第58巻第5号 88-102頁
- 藤森弘子(2000)「談話における『コトガアル』の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第26号33-47頁
- 藤森弘子(2003)「ことがある」『形式名詞がこれでわかる』(吉川武時編) ひつじ書房 50-58頁
- 前田直子(2006)「原因・理由の暗示的累加を表す従属節 こともあって・ことだし」『複合辞研究の現在』(藤田保幸・山崎誠編集) 和泉書院87-102頁
- 松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2、27-52頁
- 呂雷寧(2010)「無意志自動詞表現と「Vる+ことがある/ない」との比較」『言葉と文化』第11号(名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻) 165-180頁

付記 本稿は第99回国語彙史研究会(2011年)における口頭発表の内容の一部に、加筆修正を加えたものである。席上、その他で多数の有益なご意見・ご教示を賜った。発表後、福田嘉一郎先生からメールで有益なご教示をいただいた。また、本稿の執筆にあたり、小田勝先生からご助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

(本学外国語学部非常勤講師)